

森の人になる

阿部健一 Ken-ichi ABE

(総合地球環境学研究所)



写真1 カリマンタンの熱帯雨林

五感のなかで、嗅覚はどこかほかの感覚とは異質である。記憶として残りにくいところがある。そのことは近年の脳科学が明らかにしている。嗅覚だけは「大脳新皮質」を経由せず、直接「大脳辺縁系」につながっているらしい。つまり、匂いは、本能や喜怒哀楽といった感情と深くかかわっているということだ。学習や経験によって獲得するような、形而上的な分析能力とは切り離されている。誤解を恐れずにいえば、生得的な領域ではなく、文化的な領域に属するということである。匂いの記憶を、イメージとして、あるいは言葉によって記憶し、再現することはきわめて難しい。

逆に言えば、匂いの記憶は、脳の奥深いところにいつのまにかひそかに仕舞い込まれているということがある。時折取り出して塗り換えられることもない。そしてある日突然思わぬ時に、強烈な情動となつて過去を蘇らせる。プルーストのマドレーヌ菓子のエピソードがよく引用される例だが、匂いもつ喚起力は19世紀文学の常套句であった。

撮影：筆者

熱帯林はどんな匂いですか、と聞かれて答えに窮した。30年の間に、さまざまな熱帯林に行っている。あの時行ったあの森林。その記憶の中に匂いを求めたが、なにも浮かび上がってこない。

思い出したのは、熱帯林が、昼間は思っていたよりずっと静かだったこと、そして暗くなると急に虫や鳥の鳴き声が耳についたこと。また、少し動いただけで汗ばむ逃げ場のない暑さとともに、湿

気を含んだどよりと重たい空気の触感もすぐによみがえった。

熱帯林の景観は、と問われれば、緑ではなくて灰色の世界です。よ、緑ではなくて灰色の世界です。よ、とすぐ答えることができる。手つかずの熱帯林を歩くと意外なほど緑は少なく、二抱えも三抱えもある巨木の幹のみが視界に入る。実際には灰色ではないが、うっそうとした緑の世界であることが裏切られた印象が灰色というイメージとして残った。生きものの豊かな

緑の世界は、地上から30メートルも40メートルも離れた樹冠のなかにある。

その樹冠を見上げた時に、樹冠の間から見えた空の青さも熱帯林の風景として挙げることもできない。見上げている自分がそこに落ち込んでゆくような不思議な気分になった。夜になるとそこに考えられない数の星がまたたいて、今度は息が詰まるような気分になった。今でもそのときの感覚は鮮明であ

熱帯林に関わって、この森林の保全について考えるようになってきた。あれやこれや書き散らかしてきた。生物多様性、生態系サービス、REDD+などの概念に乗っかったり、批判したりしながら、熱帯林がいかに人類にとって大切なものであるのか、さまざまに論じてきた。

しかし、たとえば、なぜ熱帯林を護らなければならないのか、という問いに、自分自身で本当の答えを出していないのでないかと思ふことがある。理屈をこねまわしているだけでないか、とどこかで自分を疑っている。熱帯林の価値を金銭換算して保全に導くようなやり方ではだめでないか、といいながらそれに代わるものを提示できないでいる。

今は安易に答えを出すよりも、考え続けたいと思う。それでも、いやだからこそ、ある日何かのにおいを嗅いだ拍子に、熱帯林での経験が言葉でなく強烈な感覚として立ち現われ、森についてノスタルジックに熱く語れるようにならないか、と思ってしまう。森の人になりたいのである。

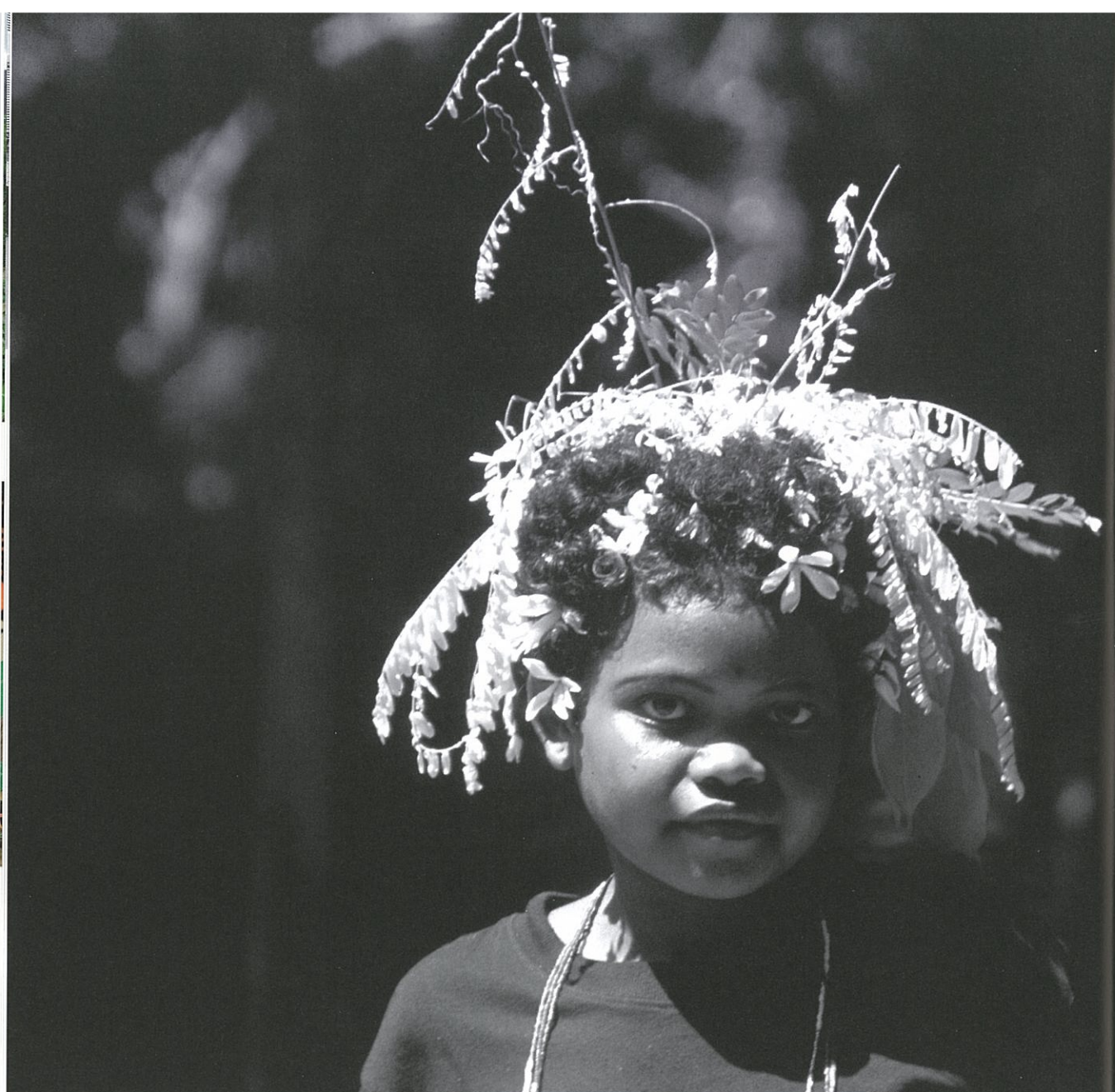


写真2 マレーシアのオラン・アスリ(森の人)